

## 『興津弥五右衛門の遺書』論

宮崎, 隆広  
福岡女学院教諭

<https://doi.org/10.15017/12035>

---

出版情報 : 語文研究. 54, pp.13-20, 1982-12-20. 九州大学国語国文学会  
バージョン :  
権利関係 :

# 「興津弥五右衛門の遺書」論

宮崎隆広

「興津弥五右衛門の遺書」（以降「興津」と略す）は歴史小説の第一作とされながら、先行している鷗外の現代小説につながる面が濃厚にある。第I章では、これらの面を手がかりに、興津の人間像を検討する。第II章では、「興津」をめぐるいくつかの問題、乃木自刃との関係・興津と節蔵との類似・「新聞国」との並行・全面的改稿等の諸問題を考えながら、鷗外の「興津」へのかかわり方に言及したい。

（なお、以下ことわらない限り、「興津」は初稿をさす）

## I

まず、「興津」を、相役との論争内容と、死の様相との二面から見てみる。

最初に論争内容を検討する。

興津は相役と二人主命をうけて、主君松向寺殿が茶事に用いられる「珍しき品」を買求めに長崎へ出向く。幸いな事に「伽羅の大木」が渡来している。その「伽羅の大木」には「本木と末木との二つ」

があつて、興津と伊達家の役人が、本木の方を手に入れようと互いにせり合い、値段をつり上げる。相役は、「仮令主命なりとも、香木は無用の翫物」と考え、香木に「過分の大金」をなげうつことに反対し、本木を伊達家に譲り、末木の方を買求めるよう興津に進言する。興津は、「珍らしき品を買求め参れ」という主命を第一に考え、その「珍しき品」は伽羅の本木だとしてゆずらない。このあたりから興津と相役との論争が始まる。

相役は、「高が四疊半の爐にくべらるる木の切れ」に「大金を棄てんこと存じも不寄」とし、たとい主君自らが大金をはたいて本木を手に入れようと思われても諫め止めるべきだと言う。興津は相役に、「それは奈何にも賢人らしき申条なり」と真向うから反対、やはり主命第一、「主命たる以上は、人倫の道に悖り候事は格別、其事柄に立入り候批判がましき儀は無用なり」とはねつける。

双方の議論は全くかみ合わない。双方の立っている次元が違っているからである。相役は相対的な現実の世界に足場を置いてものを考えているのに対し、興津は現実の世界を一挙に躍り越えた絶対的な次元でのものを考えていくからである。

興津は今迄、主命絶対論の立場で相役と論争して来た。所が、突然「人倫の道」というもう一つの原理を立てる。興津の立場にはどこか亀裂がある。興津が不用意にもらした「人倫の道に悖り候事は格別」という、主命絶対論とは矛盾しそうな言葉をとらえ、相役は興津をなおも追いつめて行く。「お手前とても其の通り、道に悖りたる事はせぬと申さるゝにあらざや、これが武具拵ならば、大金に代ふとも惜しからじ、香木に不相応なる価を出さんとせらるるは、若輩の心得違なり」と。興津は「武具と香木との相違は某若輩ながら心得居る」と受けて立ち、泰勝院殿の御代の細川家の事例を出し「御当家に於かせられては、代々武道の御心掛深くおはしまし、旁歌道茶事迄も堪能に為渡らるるが、天下に比類なき所ならずや」と切り返す。

これは相役の問への答えにはならないのみならず、興津自身のいう「武具と香木との相違」の説明にもなっていない。

更に興津は、相役との論議を無視するかの如く、例の「茶儀は無用の虚礼なりと申さば、国家の大礼、先祖の祭祀も総て虚礼なるべし」という有名な言葉を吐くのである。そして、主命絶対の立場をもう一度述べ、「貴殿が香木に大金を出す事不相応なりと被思候は、其道の御心得なき故、一徹に左様思はるゝならん」と、全く論議の筋とは無関係な喧嘩を売ろうな激情的な言葉を浴せかけ、双方、刀での切り合いに及び、興津は相役を討果してしまふ。

冷静に見ると、興津の言葉はねじれ、飛躍している。「茶儀は無用の虚礼なりと申さば、国家の大礼、先祖の祭祀も総て虚礼なるべし」という言葉は、その最たるものである。「茶儀」が何故「国家の大礼、先祖の祭祀」と結びつくのか。双方の論議の中には、「国

家の大礼、先祖の祭祀」の問題は一度たりとも出て来ていないのに、何故興津は突然これを出して来たのか。作品内部の双方の論争をたどる限り、「茶儀」が「国家の大礼、先祖の祭祀」と結びつく必然性は全くないといつてよい。興津の言葉のねじれと飛躍を象徴的に示している「茶事は無用の虚礼なりと申さば、国家の大礼、先祖の祭祀も総て虚礼なるべし」という言葉を検討することを通して、興津の人間像をさぐってみたい。

「国家の大礼、先祖の祭祀」、或いはこれに準ずることをめぐって思索して来たのは、鵬外作品の他の主人公達であったはずだ。「青年」の大村荘之助や純一であり、「かのやうに」連作の主人公五条秀麿であり、又或る意味では、これらの全否定という形でかわっていた「灰燼」の節蔵であった。

「青年」の大村や純一は、近代の個人主義思想が「忠義」や「孝行」という様な旧秩序を破壊し無政府化していく現状をふまえて、もはや無視できない既定事実としての近代の個人主義と旧秩序との両立を模索し、「利他的個人主義」という考えに到達した。

「我といふ城廓を堅く守って、一步も仮借しないであつて、人生のあらゆる事物を領略する。君には忠義を尽す。(中略)親には孝行を尽す。(中略)忠義も孝行も、私の領略し得た人生の価値である。(中略)生が万有を領略してしまへば、個人は死ぬる。個人主義が万有主義になる。」(二十章)

すでに「忠義」「孝行」等が空洞化しつつある現状をふまえて、それらをもう一度、個人主義の立場から救いようとしていのである。「興津」の文脈に引きよせていえば、「国家の大礼、先祖の祭祀」という旧秩序の根幹が「虚礼」化しつつある現状の中で、近

代的な個の立場から、その再生、その復権をはかっていたといえる。その「利他的個人主義」という考えは、単なる概念操作にすぎず、鷗外はその非現実性、無効性の故に、「青年」の「一応」の終了と共に保留したと思われるのだが、このことは別にしても、「国家の大礼、先祖の祭祀」をめぐる鷗外の思索は、はやく「青年」において形をとっていたのである。

「かのやうに」の主人公五条秀麿は、「神話」と「歴史」との共存の道を求めて苦悶していた。「神話」は「人生の重要な物」を包んでいいるが「歴史」ではない。だが「歴史」ではないと明言すると、「人生の重要な物」がこれれそう不安がある。しかし、「神話」と「歴史」とを区別しないでは、近代的な歴史研究は一步も前に進まない。秀麿の苦悶はここにあった。「国家の大礼、先祖の祭祀」の根柢になるのが、いうまでもなく「神話」であることを思えば、秀麿も「国家の大礼、先祖の祭祀」という旧秩序の根幹がゆらぎつつある現状の中で、それと近代的「歴史」観との共存をはかっていた、即ち、近代的な知の立場から、その再生復権をはかっていたといえる。その処方箋が「かのやうに」の哲学であったわけである。

「かのやうに」の哲学や秀麿の思考を鷗外自身が全面的に信じていたわけではない。第一作「かのやうに」の中では、綾小路によって秀麿の考えは否定されているし、第二作「吃逆」においては、秀麿達の知的な論議も、その論議を全く理解できず退屈しか感じない芸者達の言動によって、その非現実性・抽象性が間接的に暴かれているといえる。題名の「吃逆」にしてからが、秀麿達の論議とは全く無関係な、芸者の一人がやる吃逆から来ているのである。第三作

「藤棚」の中にも、「概念」を媒介にしない境地が描かれているし第四作「鎗一下」は、文字通り前三作に「鎗一下」を加えて否定するていの作品であるからである。

鷗外の態度は曖昧ではあるが、「かのやうに」連作の中で、秀麿が「国家の大礼、先祖の祭祀」と近代的知性との共存の道を模索していたことを指摘すれば足りる。

(「灰燼」の節蔵との関連は後に述べる)

興津の「茶儀は無用の虚礼なりと申さば、国家の大礼、先祖の祭祀も総て虚礼なるべし」という言葉の背後には、これらの主人公達の思索があったのである。彼等の思索を手がかりに興津の言葉を解釈するところのようになるであろうか。

興津は、さきの主人公達と等しく、「国家の大礼、先祖の祭祀」を無条件に全面的に信じていたわけではあるまい。いや、むしろ、その虚妄性をひそかに直感していたからこそ、飛躍した論理をも意に介さず、「虚礼」と化しつつある「国家の大礼、先祖の祭祀」の再生復権をめざして、「茶儀」有用論に必要以上にこだわっているのだ。「茶儀」そのものはどうでもよいのだ。大事なものは「国家の大礼、先祖の祭祀」という大義の方なのだ。その顔死に直面している大義を自ら信じて守ろうとしているというよりは、その虚妄性を見抜いた上で、なおかつ、個の「領略」において、換言すれば、個の創造的な実践行為において、それを再生復権しようとしているのだ。主命絶対論にこだわっているのも同じ気持ちである。

これは、一見そう見えるかも知れないが、「青年」の「利他的個人主義」の焼直しではない。それとは次元が全く違う。大村や純一、秀麿達の思索を受けつきながら、個の創造的な実践行為において、そ

れらを飛躍的にのり越え、深化させているといえる。しかし、それが飛躍であることにかわりはなく、それが「茶儀」から「国家の大札、先祖の祭祀」への飛躍と重なっているのである。

興津の死の様相の方に目を転じてみる。

興津は相役を殺し、「主命大切と心得候為めとは申ながら、御役に立つべき侍一人討果たし候段、恐入候へば、切腹被仰附度」と、主君松向寺殿に切腹を願ひ出る。主君からは、「其方が申条一々尤至極なり、仮令香木は貴からずとも、此方が求め参れと申附けたる珍品に相違なければ、大切と心得候事当然なり、総て功利の念を以て物を視候はば、世の中に尊き物は無くなるべし」という、あたかも興津と意を合わせたかのような御言葉をいただき、許されるのである。

しかし、「一旦切腹と想定」めた興津は「窃に時節を相待」っているが、「繁務に被逐、空しく月日を相送」っている。嶋原征伐の時には「戦場にて一命相果たし可申所存之処、御当主の御武運強く」「宿望」を遂げることができず、「余命を生延」ている。やがて、妙解院殿がなくなり、ついで主君松向寺殿、肥後守殿がなくなり、肥後守嫡子六丸殿が跡をつぐ。興津は「六丸殿の御事心に懸かり、責ては御元服被遊候迄、乍余所御安泰を祈念致度、不識不知許多の歳月を相過」す。そのうち、六丸殿も越中守となり、「上様の御覚目出度」く、興津の心に懸ることは最早何もなくなる。そこで、「殊に御恩顧を蒙候松向寺殿の十三回忌を待得」て、「殉死は国家の御禁制なる事、篤と承知」の上で、「遅鈍に御跡を奉慕」り、殉死するのである。

この殉死は「阿部一族」で描かれているそれとはかなり趣を異に

している。興津は主君から存命の許しを得、且つ、相役の嫡子との間に「互に意趣を存間敷旨誓言」までかわしながら、「一旦切腹と想定」めた限り、主君存命中から、主君の許しとも無関係に、その死を貫こうと「窃に時節」を待っているし、戦時には「一命を相果た」そうと待ちかまえている。これは、主恩に対する報謝としての死という線にそいながら、その実、自己一身の倫理の貫徹をめざしているのである。一人「草庵」に「桑門同様の渡世」をし、「国家の御禁制」をやぶり、一人「窓の雪明り」で腹を切っているのも、そのあらわれである。相役との論争内容を述べた所で、私は興津の△個▽性を指摘したが、死の様相においても、その△個▽性は歴然としていた。

興津は、その思想においても死の様相においても、「国家の大札先祖の祭祀」護持、主命絶対の装いを持ちながら、△個▽の創造による再生復権という点で、それらを背後から串さしにさし貫き、それらを超えているといえるのである。

このように見えてくると、興津弥五右衛門は徳川時代の武士というよりは、創造的な近代の個人主義者に近いのである。かくて、興津は「危険思想家」と紙一重である。どこやら、節蔵のおもかげと重なってくる。

## II

第I章では興津の人間像を問題にし、創造的な近代の個人主義者のおもかげを指摘した。第II章では、「興津」に関する諸疑問を解きつつ、嶋外の「興津」へのかかわり方を問題にする。

「興津」執筆の契機となったのが乃木自刃であったことは、既に定説となっている。日記に照らして否定すべくもない。

「十三日（金）晴。輜車に扈隨して宮城より青山に至る。午後八時宮城を發し、十一時青山に至る。翌日午前二時青山を出でて帰る。途上乃木希典夫婦の死を説くものあり。予半信半疑す。

十八日（水）半晴。……午後乃木大将希典の葬を送りて青山斎場に至る。興津與五右衛門を草して中央公論に寄す」

茂吉の説以來、「興津」は乃木大将の自刃を弁護したものとす意見が有力である。

「鷗外先生は、乃木大将殉死行為に対する有力学者等の批判が新聞に載つたのを読んで、先生の抱懐した信念を、議論の形式に抛らずに、過去の事実を外貌としてその中に織り込ませるといふ歴史小説的手段を取つたのであった。（中略）この小説の意図を約めていへば、乃木大将の殉死行為について、世の学者等は彼此いつてゐるが、己の考はちがふ、といふことに帰著する。」（「鷗外の歴史小説」）

しかし、同じく茂吉によれば、

「この、『興津弥五右衛門の遺書』はさういふ思想的意図を織り込ませた小説で（中略）批評家の注目に価するものとおもふが、残念なことには当時のこの文壇評では、誰一人その意図を洞察せしむる如くであった。」

鷗外に乃木大将の自刃を弁護する気持ちがあつたことは確かだと思ふが、なぜ論評という形で弁護しなかつたのか。現に、「興津」が掲載された「中央公論」の大正元年十月号には、「乃木大将の殉

死を評す」という題の下に五人の論者が意見を述べているし、中央公論社の「社論」としても、「乃木大将夫婦の殉死」を取りあげている。鷗外の「興津」は、小川未明「白痴」、田山花袋「郊外にて」と共に、小説欄にさりげなく掲載されているにすぎない。鷗外は何故、フィクションによる弁護という形をとつたのであろうか。これを疑問の一とする。

さきに、第一章の終りで、興津のおもかげが節蔵と似通っていることに言及した。このことをもう少し詳しく見てみる。

「灰燼」の節蔵は、二十以前で既に「一切の物に対する興味」と「要望」とをなくしている。「他人が何物かを肯定してゐるのを見る度に『迷つてゐるな』と思ふ。「気の毒な奴だな」と思ふ。「馬鹿だ」と思ふ」ような人物である。そして「肯定即迷妄」と観じて世間を冷眼に、「無意味」に見ている虚無主義者である。

従つて、表面にはあらわれていないが、「国家の大札、先祖の祭祀」等も、節蔵からは「迷妄」として否定されることは間違いない。「青年」や「かのやうに」におけるような、秩序を個の立場から救抜しようという知的操作も、「迷妄」としてしりぞけられるはずである。

節蔵は「眞の生」（「妄想」）から隔絶した地点で、全てのものを虚無の刃で無意味化しながら、徹底した全否定を生きている。一方、興津は功利主義的批判を排除し、△個▽の「領略」において「万有」を創造しながら、全肯定を実践的に生きている。このように見てくると、両者は、正反対の方向をむきながらも、その屹立した△個▽の構造において、不思議に類似しているのである。もし、鷗外が後者をとり前者を捨てたとするならば、後者が捨てたはずの前者

と類似しているとはどういふことか。疑問の二とする。

疑問の二で述べたように、興津の生き方と節制的生き方とは、平面的に見ると正反対で両立しない。しかし、鷗外は、興津を肯定的に描きながら、同時に、これとは矛盾する節制的の「血の出るやうな諷刺」である。「新聞国」(「灰燼」十八・十九章)を書いている。これはどのように理解したらいいのか。疑問の三とする。

「興津」は、初稿脱稿後、短期間の後に、全面的に改稿され、当初の面目を一新している。これは異例のことである。疑問の四とする。

これらの疑問を同時に解くことは出来ないであろうか。

引用した鷗外の日記をよく読むと、乃木自刃の報に接しての「予、半信半疑す」という言葉がにわかに興味を帯びてくる。この「半信半疑す」という言葉は、事の真偽についてまよったということを示すと同時に、事の当否・是非についての鷗外自らのまよいをも表わしているのではないか。乃木自刃を素直に納得し肯定する気持ち(「信」と)、違和感を感じ否定する気持ち(「疑」と)との相反する複合した感情をも表わしているのではないか。

ここで、「信」即ち乃木自刃への肯定的評価と、「疑」即ち近代的懐疑からくる否定的評価という視点から、「興津」をもう一度見直してみよう。

まず、「信」の部分は「興津」の中に、どのように形象化されているか。これは乃木自刃を肯定する、つまりは興津殉死を肯定的に描いている部分と考えれば、「興津」全文がそれに相当すると思われるので詳説しない。

「疑」の部分は、相役の興津に対する批判の中に形象化されてい

ると考えてよい。批判の内容は第I章でふれたので省略する。

所で、二人の論争部分に相当する原史料「翁草」の文章は次の通りである。

「長崎表異國船入津の折からに、彼地へ家来を遣はし、珍器を求させらる、一と年興津弥五右衛門と云士に、相役一人添て差越さるゝ処に、異なる伽羅の大木渡れり、本木と末木と二つあり、其のころ松平陸奥守正宗よりも、唐物を調ん為、役人下り居しが、彼伽羅の本末をせり合ひて、三齋の役人と互に励て直段を付上る、興津が相役是を気毒に思ひ、斯ては直段夥しく高直なれば、所詮同木の事なれば、末木の方にせんと云、興津は是非本木を調んと云募りて、口論に成り彼の相役を打果し、終に本木の方を調て、隈本に帰り、右の段々を申達切腹を願ふ、三齋の云く、某へ奉公の為に、相士を討し事なれば、切腹すべき謂なし……」

相役と興津との論争内容に相当するものは、ごらんの通り、史料の中には全くない。凡て鷗外の創作である。

相役、鷗外創作による批判的言辭は、興津の「賢人らしき申条」という言葉によって高飛車にさえぎられ、飛躍した論理もものは、否定されてしまう。更に、主君三齋公によつても、「総て功利の念を以て物を視候はば、世の中に尊き物は無くなるべし」(これも勿論、鷗外の創作である)と、暗に相役の批判は矮小化された上で否定される。

しかし、否定されている相役の言葉の方が、飛躍した興津の論理より、又、無責任とも思える主君の言葉よりも、なほどうか説得的なのは皮肉である。相役は単に否定される為だけに便宜的に創作さ

れたのではあるまい。鷗外の中の「疑」に、その心的根柢を持っていたはずである。

以上のことを鷗外に即していえば、乃木自刃に対する「疑」の部分を一時保留して、むしろ「信」の部分だけで「興津」が執筆されたというものを物語っているのではないだろうか。つまり、一時「疑」を棚上げし、「信」の部分で、乃木自刃から受けた感動を実験的に生きてみたのが「興津」なのだ。そして、作品の表面からは、否定され消去されているものの、「疑」の部分は鷗外の中に依然として生きていたのである。

このように考える時、さきの疑問がなにがしか氷解する。

鷗外は何故、乃木自刃から受けた感動を、乃木遺書の形を模した小説というフィクションの形で表現したのか。それは、消極的には、乃木自刃の是非に対する「半信半疑」という正負相反する複合した気持ち、短時間のうちに論評の形でまとめるのがむずかしかったということ、また、積極的には、鷗外に対して生前それとなく形見分けまでしようとしていた乃木大将を軽々に批判する気持ちになれず、懐疑の気持ちを一時捨ててまで、乃木自刃から受けた感動を自分のものとして追体験し、その意味を確認したかったことが主な理由であったらうと思う。端的に言えば、「半疑」を保留してまでも、「半信」の部分で主張・弁護したい衝動が鷗外の中にあつた、言葉遊びめくが、半心での実験的な主張・弁護であつたが為に、多少なりとも遊びがあるフィクションの形の方がふさわしかったのだと思われる。

第二の疑問、興津と節蔵とは正反対でありながら、何故、その△個▽の構造において類似しているのか。鷗外は「灰燼」の中で、

近代的な個人の一つの極北であるニヒリスト節蔵を造形し、それを否定的に超出しようと苦悶していた。節蔵は、鷗外の近代的な懐疑、今の文脈に即していえば、広義の「疑」によって裏打ちされていたといえる。この時、突如として出来した乃木自刃は、鷗外に「疑」に対する強力な一つの答えを暗示したはずである。興津的な生き方はその一つの答え、しかも「半信」での答えなのだ。だとすると、疑問の構造が答えの構造を規定するように、節蔵と興津とが、△個▽の構造において類似したところで、何の不思議もないといえる。

鷗外は、節蔵を一方的に否定し、興津を全面的に肯定しているのではない。節蔵が鷗外の否定的分身だとするなら、興津は肯定的分身なのである。或る意味では二人は双生児なのだ。両者は、この時点では止揚されなのまま並存しているのである。鷗外の中で、両者が五分五分で拮抗していたというつもりはない。後の作品群からみて、興津の方に心を寄せていたことは事実であろうが、初稿「興津」の時点では、興津が節蔵を排除するような関係ではなく、両者並存の可能性は高いのである。

疑問の三である「興津」と「灰燼」の「新聞国」との並行現象、これは、もはや簡単である。鷗外の中に「疑」の部分が生きている限り、そして「新聞国」がその「疑」の部分で書かれている限り、当然のことともいえる。

やがて、鷗外の中の「疑」がその正当な復権を求め、「信」「疑」を越える新しい次元での解決にむかって、鷗外を促し始めた時、全面的な改稿が行われるのである。



## 注

- 注1 拙稿「存在の根への郷愁」(『近代文学論集第8号』昭57・11)  
注2 佐々木充「興津弥五右衛門の遺書」論(『国語国文研究』昭53・7)に同様の指摘がある。
- 注3 竹盛天雄「歴史小説集『意地』おぼえがき」(『明治大正文学研究』22号)に「国禁を犯してまでも自己のモラルに忠実であるうとする、誠実で律気な武士」「やゝ自由人」「階級離脱者といってもよい孤立的人間」という、興津についての示唆に富む言葉がある。
- 注4 高橋義孝「森鷗外」(五月書房)P・93に「実験だったようだ」との指摘がある。
- 注5 注2の佐々木論文の中に、魅力的な別解がある。